

学位請求論文要旨

般若経から『瑜伽師地論』菩薩地、『解深密経』への空性思想の展開

大正大学大学院仏教学研究科仏教学専攻 研究生
浅野秀夫

1. はじめに

本論文は、仏教思想の変遷の中から大乘仏教が成立し、空の思想を際立たせて以降、これを『解深密経』が三性説へと集約させるまでの期間を切り取り、そこに一つの断面として浮かび上がってくる般若経、龍樹、瑜伽行派という三つのキーワードに焦点を当て、従来、語られることの少なかったように思われる般若経から『瑜伽師地論』本地分「菩薩地」（以下『菩薩地』という。）を経て『解深密経』へと展開する空性思想を考察することにより、三性説へと至る思想的背景をいささかなりとも解明することを目的としている。

空性思想の流れを論じるに際し、これら三つの経論を結び付ける手掛かりとして、般若経と『解深密経』「勝義諦相品」の双方に登場するスプーティとダルモードガタ菩薩に注目し、『菩薩地』の所説を考慮しながら、般若経と「勝義諦相品」の双方に共通する空性理解を探ることにより、これらの思想的連関を考察した。対象とする般若経は、基本モデルともいえる『八千頌般若経』を主として採り上げた。

本論文は全三章から構成され、先ず、第一章でスプーティとダルモードガタ菩薩を中心として『八千頌般若経』の空性理解を論じ、次いで、第二章で瑜伽行派の空性理解がどのように形成され、『菩薩地』に反映されたかを考察し、最後の第三章で、般若経と『菩薩地』の空性思想がスプーティとダルモードガタ菩薩を通じてどのように「勝義諦相品」へと集約され『解深密経』の空性理解を形成してゆくのかを述べている。

2. 第一章の概要

『八千頌般若経』では、声聞であるスプーティが世尊の対告衆として抜擢され、菩薩の在り方に関して世尊と問答を繰り返す。その中で、一切法の無自性、空が語られ、法の本質は「言葉では表現できない」、それが空性であると説かれる。同経はスプーティを介して言葉への不安を強調する一方、如来の教えを現実に衆生へ説き明かすには言葉への依存が避けられず、この自家撞着を阻止するため、悟りを得た如来の言葉を「教えをもたらす説明」として、これにのみ信を与えることで、説示の正当性を確保し、声聞乗からの非仏説との謗りを回避すべく工夫を凝らしている。

そして、経も終盤に差し掛かる段階になり、空性に固執し、般若経が強く打ち出した「完全な智慧」の修得という菩薩の目的を見失っているスプーティを描き出す。これは、世尊の弟子といえども、声聞としての地位に甘んずることなく、主体的に菩薩道へと踏み出すよう予め企図された物語の結末であると解釈できる。スプーティは声聞でありながら、脱声聞のシンボルであったといえる。

一方、経の全編を通して登場するスプーティに対し、経の取りを務めるのがダルモードガタ菩薩である。求法の旅に出たサダープラディタ菩薩の質問に答え、空性を真如や如

来と等置し、瞑想中にこれを洞察すると具体的に語る。これが、まさしく空性体験であり、真如の存在を確信する一瞬である。それは言葉による思考の産物としてではなく、瞑想中に立ち現れるのであって、真如の対象化＝概念化を厳しく戒めているといえる。世尊とスプーティとの対話を、完全な智慧とこれの修得に至るまでの過程を述べた論理的枠組みと捉えるならば、ダルモードガタ菩薩の説示は理論を具体的に実行した一つの結果を表したものであり、経の趣旨を読み手にわかり易く伝えるのに効果があったと思われる。

3. 第二章の概要

『菩薩地』は、空性理論を構築するにあたり、『瑜伽師地論』本地分「声聞地」を介して阿含経をその基礎に据える。それは、『小空経』を引用し、「余れるもの」は確かに存在するという瑜伽行派にとって動かし難い事実の枠組みを確定することから始まる。この枠組みの中に「如来の隠された意図」を備えた経典として、非仏説との批判を回避しつつ、般若経の空性思想が組み入れられる。一切法は空であり、「法は言葉では表現できない」という般若経の空性思想は、言葉の虚妄性を排除する姿勢を強調すると共に、「法には言葉では表現できない自性がある（＝離言自性）」と修正され、これを「余れるもの（＝事象）」と等値し、さらには真如であると位置付ける。

さらに、言葉を生じさせる要因、概念設定の根拠として事象を捉え、この事象の存在を認めることが正しい空性の理解であると主張する。瑜伽行派は、瑜伽行の最終局面においても、否定し切ることのできない何ものかが依然として残るという自らの体験を通じて感じ取った事実を浮き彫りにしたかったのではないかと考えられる。それは、『八千頌般若経』では「言葉では表現できない」と否定的な側面から捉えていた法を、「言葉では表現できない自性がある」と肯定的な表現で記述する態度として表れ、真如という術語を頻繁に用いる思想へと推移してゆく。

こうした瑜伽行派の空性理解は、『八千頌般若経』で示された「完全な智慧」に向かって実践するという菩薩の修行の核心を、「究極の目的（＝勝義）」に向かって実践すると言い換えるが、この両者を媒介するものとして「法無我」を導入する。一切法には言葉では表現できない自性があり、それは無分別で平等であることを法無我と定め、これを体得することによって正しい智慧が生じ、勝義へ導かれると説き示す。『菩薩地』は、声聞乗のように、四聖諦を観察して煩惱障を断じ、解脱を得ることで、「人無我（＝人空）」を修得するだけでは所知障を克服できないと批判する。そして、真如を観察することにより、初めて所知障を断ずることができ、菩提を得て、「法無我（＝法空）」を修得し得ると説き、法無我の優位性を主張する。菩薩には、人空と法空の二つの空を修めることが求められる。そこには、声聞乗の枠を飛び出し、大乘という新たな地平への飛躍を誓う瑜伽行派の強い意思が感じられる。

ところで、『菩薩地』は空性思想を組み立てる過程において、龍樹の著した『中論』の思想の影響を少なからず受けている。そのことは、龍樹の系統の思想への批判という形で表れる一方、龍樹への共鳴という形でも示される。瑜伽行派の批判の矛先は、先ず以て、言語化の根拠としての事象の存在、つまり、「言葉では表現できない自性があること」を否定しかねない状況を生じさせたことに向けられる。龍樹の提唱した相互依存関係に基づく縁起が空性と等値されることで、言語化の根拠までも喪失させる事態を招いたからであ

る。瑜伽行派は、自らの空性理論の基本的枠組を構成する事象の存在を認めずに空性を理解する者を虚無論者と非難し、「言葉では表現できない」という般若経の主張を「虚無」と曲解することへの危険性を訴える。

ただし、その文脈からは、虚無論者とは龍樹その人を指すのではなく、龍樹の系統下にある仏教思想家の者達を意識していたと推測される。あらゆるものの存在を認めない虚無の世界は、世尊の菩提樹下での成道という事実の存立さえも危うくする。これを打破するため、『菩薩地』は、虚無論者が陥った誤解に基づく「無」の状態と、これの対極に位置し、法は不変的に実在するという説一切有部の思想の「有」の状態とを離れた「非有非無」の中道という新たな道を切り開く。こうして、龍樹の系統への批判が『菩薩地』誕生の一つの要因となり、中道を導き出す切っ掛けになったのではないかと思われる。

一方、龍樹の考え方に賛同し、これを受け継いでいる箇所が『菩薩地』には見られる。我々の世界は言語の広がりによって作り出された仮の姿であることを、『中論』は「言葉の虚構（＝戯論）」と表現するが、『菩薩地』もこの戯論に基づく世界観を継承し、そこからの脱却を目指す。言葉への不信感、世尊の教えをどのように受け止めるかという課題を生じさせるが、『中論』では、「勝義諦」と「世俗諦」という二つの現実（＝二諦）を設定し、世尊は世間の言葉を用いて衆生に語り掛ける（＝世俗諦）ものの、これは成道という世尊のみが体験した事実（＝勝義諦）に立脚するものであるから拝聴するに値すると説き示し、世尊の言葉にのみ信を与え、言語化の根拠を担保する。

瑜伽行派はこの二諦の理論を引き継ぐが、『菩薩地』では僅かに取り上げられているに過ぎない。しかしながら、後に記述される『解深密経』では、勝義諦を瑜伽行派の立場から解釈し直し、これを「勝義諦相品」として纏め上げる。瑜伽行派が勝義諦を重要視したことは、龍樹から強い影響を受けていたことを表している。

4. 第三章の概要

瑜伽行派は、『菩薩地』に続き、空性理解の集大成として『解深密経』を著す。その「勝義諦相品」に、ダルモードガタ菩薩とスプーティが登場するが、先ずは両者が姿を現す前の第一章で、同品全体に共通する「一切法は言葉では表現できず無二であること」が勝義の第一の特質として提示される。

「法は言葉では表現できない」と説く般若経の主張を受け入れ、概念設定される物事や現象は有為でもなく無為でもないと言くと共に、概念を設定するには、言語化の根拠となる事象の存在が欠かせないとする『菩薩地』の思想を併せて継承し、聖智と聖見によって言葉を遠ざけた状態で事象を洞察する、これが勝義であると述べる。

ここには、概念設定の否定という龍樹の主張も取り込まれているが、勝義と事象を結び付けることにより、言語化の根拠を確実に保証し、あらゆることを否定する姿勢に歯止めをかける工夫が成されている。勝義の第一の特質は、龍樹の提唱した「勝義諦」を瑜伽行派の立場から見直す礎を築いたといえる。

また、第一章では、概念設定の対象となる事象は、衆生の有する「行（認識を形成する力）の生み出した言葉をもたらす原因」とであると断定し、衆生が潜在的に備える認識機能に言語化の根本的な原因を見出している。

第一の特質を前提として、続く第二章でダルモードガタ菩薩に対して説かれる「すべて

の考察を超越していること」が勝義の第二の特質となる。超越していると記述されることから明らかのように、考察という言葉に支配された世界（世俗）から言葉の及ばない世界（勝義）への移行を促している。これは、法の遍計所執という特質（概念設定したもの）から円成実という特質（真如）への変容を説いた「一切法相品」の三性説へのプロローグともいえる。

このことから、第二章は第一章と共に、般若経から『菩薩地』へ継承された空性思想を『解深密経』へと手渡す仲介役を果たしているといえる。瑜伽行派は、この仲介に合理性を与え、自らの主張に正当性をもたせるため、抛りどころとなる般若経では「説法する」側であった同経を代表するダルモードガタ菩薩を「勝義諦相品」では「説法を受ける」側へと逆の立場に据え、般若経の延長線上にある勝義の特質を新たに説き聞かせたのである。

第一章で事象と等置された「行の生み出した言葉をもたらず原因」は、第三章へと受け継がれ、「言葉をもたらず原因と異なることと異なるいことを超越していること」が勝義の第三の特質であると説かれる。異なるのでなければ、言葉をもたらず原因を勝義であると誤解することになり、異なるのでなければ、言葉をもたらず原因に執著し、涅槃へ達することもないからである。

さらに、言葉をもたらず原因を雑染という特質に置き換え、この雑染という特質の上に勝義の特質が存在する、と特質の構造的な捉え方を提示し、両者が異なることは、雑染という特質と勝義の特質とが同等ではないことによって否定される。一方、雑染という特質は無我と無自性を意味し、これが勝義の特質となることから、両者が異なることも否定される。無我と無自性は、清浄という特質で言い表される。

雑染という特質に置換された言葉をもたらず原因は、行によって生み出され、実際に言葉で表現されて、人はこれに執着する。この人間の性は、無明に基づき、行が活動を開始し、これにより識が生じて、名色が形成されるというアビダルマの十二縁起に他ならず、このことが、三性説において言葉をもたらず原因を法の依他起という特質に充てる背景となる。

また、雑染という特質は、依他起という特質に言い換えられると共に、構造上は遍計所執という特質の抛りどころとして、また、法無我や真如を同義とする円成実という特質の基体として理解されるようになる。このように特質を構造として把握する第三章は、三性説を立体的に俯瞰する下地を整えたといえる。

第三章で清浄という特質を表現した無我に焦点を当て、「一切において一味であること」が勝義の第四の特質である、と第四章でスプーティに明かされる。既に般若経では、法の「差異も区別も認められない」状態が示されており、この状態を一味と言い換えているのであるが、そこには一切法は無分別で平等であり、それは法無我に関する智慧によってもたらされると説く『菩薩地』の思想も組み込まれている。

つまり、スプーティは、法の一味という状態を既に知り得ていたが、これを洞察する智慧が法無我に基づくことを新たな事実として修得するのである。

このように、般若経の空性理解に『菩薩地』の思想で厚みを持たせる形で説かれた勝義の四つの特質は、『中論』で説かれた勝義諦を理論的に再構築することとなり、三性説へと発展する基礎を固めるのである。

5. まとめ

これまで論じてきた『八千頌般若経』から『菩薩地』を介して『解深密経』「勝義諦相品」へと展開する空性思想の流れは、次の三つの項目に纏めることができる。

(1) 声聞スプーティの菩薩化による大乘の優位性の確保

一切法は空であり、「法は言葉では表現できない」という般若経の空性思想は、『菩薩地』において、「法には言葉では表現できない自性がある」へと修正され、離言自性を言語化の根拠としての事象と等値し、さらに真如と位置付ける。こうした瑜伽行派の空性理解は、般若経で示された「完全な智慧」に向かって実践するという菩薩の修行の核心を、「勝義」に向かって実践すると言い換え、この両者を媒介するものとして「法無我」を導入する。

菩薩には、「人無我」を得ることに加え、法無我の修得が求められ、この法無我が、勝義の特質の一つである「一切において一味であること」を洞察する智慧をもたらす、と『解深密経』でスプーティに対して説かれる。既にスプーティは、法が一味であることと同義である「法の差異も区別も認められない」状態を『八千頌般若経』で知り得ていたが、この状態が法無我に基づくことまでは与り知るところではなかった。

『解深密経』は、般若経の終盤で空に固執し、完全な智慧に向かって足踏みしているスプーティに法無我の修得を授け、勝義への歩みを促すことで、つまり、声聞スプーティの菩薩化を図ることで、菩薩の優位性や大乘の正当性を喧伝したといえる。

(2) ダルモードガタ菩薩に託された勝義諦を再構築する意義

『菩薩地』は、龍樹の提唱した「勝義諦」と「世俗諦」の対概念を受け入れる一方、戯論の消滅した状態を縁起と解釈し、空性と等値する龍樹独特の相互依存関係に基づく縁起観では、成道の事実までも喪失しかねず、無の状態を生み出す懸念があると非難する。ここに、勝義諦を定義し直す余地が生じたことになる。

「勝義諦相品」は、龍樹が言及することのなかった言語化の根拠である事象を、概念を外した状態で洞察することが勝義に値すると述べ、事象の存在を担保する。その上でダルモードガタ菩薩に対し、「すべての考察を超越していること」が勝義の特質であると説き、考察を意味する言語に支配された世界（世俗）から言語の及ばない世界（勝義）への移行を促す。

『解深密経』は、般若経では「説法する」側の立場にあったダルモードガタ菩薩に、敢えて「説法を受ける」側の役を演じさせ、般若経の空性思想の延長線上にあり、しかも、般若経では説かれることのなかった勝義の特質を伝授することにより、般若経を象徴する菩薩でさえもが新たな知見を得たとする場面を描くことで、勝義諦を再構築する意義を高めようと算段したといえる。

(3) スプーティとダルモードガタ菩薩を仲介役とする三性説へのプロローグ

「勝義諦相品」でダルモードガタ菩薩に示された世俗から勝義への移行は、「一切法相品」において、法の視点から整理され、法の遍計所執という特質から円成実という特質への変容として書き換えられる。ダルモードガタ菩薩が『八千頌般若経』の中で語った概念設定の放棄と真如の实在は、『菩薩地』の主張する事象の存在と結び付き、勝義諦の理論と

して自らに還元されると共に、三性説への布石となる。ダルモードガタ菩薩は、般若經の空性思想を『菩薩地』を介して「一切法相品」へと手渡す仲介役を果たしたといえる。

「勝義諦相品」は、龍樹が触れることのなかった事象を「行の生み出した言葉をもたらす原因」と定義し、言葉をもたらす原因を法の「雑染という特質」に置き換え、これが「勝義の特質」へと移り変わる様を述べる。つまり、法の勝義の側面が露呈するのは、雑染という特質の理解の仕方次第であり、遍計所執という特質と円成実という特質とを媒介する法の依他起という特質の出現を予期させる。また、行を物事や現象の存在する根拠、我々が執著する存在の根源と位置付けていることから、無明⇒行⇒識⇒名色⇒・・・というアビダルマの十二縁起を前提として三性説を組み立てようとする意思が読み取れる。

このように、「勝義諦相品」は三性説への序章の役割を担うが、スプーティはこれに直接関与しない。しかしながら、瑜伽行派には、スプーティが阿含經、般若經、『解深密經』という三つの法輪すべての内容を教示された唯一の人物であることを想起させることにより、自らを阿含經、般若經の系統下に位置付け、遂には『解深密經』がこれらを凌駕したと主張する三時教判（三性説の末尾に説かれる）の根拠を強固にする狙いがあったと考えられる。スプーティは、三性説が阿含經以来、積み重ねられてきた空性思想の結晶であることを印象付け、その優越性を揺るぎないものへと押し上げる介添役を務めたといえる。

（４）瑜伽行派の經典戦略

スプーティは世尊の直弟子として、ダルモードガタ菩薩は般若經を代表する菩薩として經典へ登場する頻度も高く、仏教思想の展開を語る上で欠くことのできない人物である。こうした二人の人物に着目し、自らの思想を説き明かし承認させ、或いは、語らせることは、思想内容も然ることながら、その思想が逸早く仏教界のメインストリームに躍り出る可能性を秘めていると考える者が現れたとしても何等不思議なことではない。

そして、これを実行した者こそ、瑜伽行派であり、『解深密經』の制作者であって、自らの空性理論を三性説へと集約するにあたり、説得力のある思想へと磨き上げるための一つの手段として、スプーティとダルモードガタ菩薩の謂わば「顔」を最大限利用したのである。『解深密經』は、瑜伽行派のしたたかな經典戦略の下、綿密に練られ、記述されたといえる。

以上